

高等学校国語科における探究的な学びの実現に向けた授業開発の研究

◎中村 和弘（東京学芸大学教職大学院）

登本 洋子（東京学芸大学教職大学院）

金指 紀彦（東京学芸大学附属高校）

塚越健一朗（東京学芸大学附属高校）

星野 陽子（東京都立高島高校）

西亀 咲江（聖ドミニコ学園中学高等学校）

代表者連絡先 nakamura@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】 国語科における探究的な学び 授業開発 授業づくりチーム

1. 本プロジェクトの目的

令和6年度は、高等学校における新学習指導要領の実施が3年生まで進み、小・中・高を通した新しい教育課程が完成する年である。高等学校国語科の授業においても、従来の指導観や授業スタイルからのさまざまなアップデートが求められる一方、資質・能力ベースの学習指導や観点別評価の実施など、授業改善に悩む教員も多い。その要因の一つに、小学校の校内研究のように教員同士で授業研究を行う機会が少なく、授業改善を協働的に進めるプロセスが共有されていない点が挙げられる。

本研究では、「探究的な学びの実現」にあたり、高等学校における授業開発を通して、学習指導要領が求める国語科の学習指導や学習評価を具現化するためのポイントを明らかにすることをねらいとしている。

2. 本プロジェクトの取り組み

本プロジェクトに参加している教員をコアとして、希望する教員が全国どこからでも参加できるオンラインによる「授業づくりチーム」を組織して、授業開発のサイクル（教材研究→指導案検討→研究授業→事後協議）を展開できるようにする。

「授業づくりチーム」は国語科における探究的な学びの実現に向けて、月に1回程度の研究会を行い、

- ・日々取り組んでいる国語科の授業づくりについての情報共有
- ・科目や領域を定めて実践を持ち寄り、それぞれの指導方法についての検討
- ・授業者を決め、探究的な学びを念頭においた授業開発と研究授業の実施

などの取り組みを進める。大学教員はこれらの授業づくりの過程をていねいにファシリテートし、附属学校の教員はそれぞれの実践を参加の公立高校、私立高校の教員に紹介しながら、授業開発をリードする。また、研究会には、堀内貴臣氏（教職員支援機構）などの講師を毎回招き、授業開発への助言等を依頼した。

3. 本プロジェクトの実施内容

（1）授業づくりチームの組織と授業開発に向けた取り組み

前述のように本プロジェクトに参加している教員を中心に、授業研究に興味をもつ教員が全国どこからでも参加できるオンラインによる「国語授業づくりチーム」を組織し、探究的な学びの実現に向

第1回	2024/06/04 (火) 18:30～	1年間の授業運営に関する情報交換
第2回	2024/06/24 (月) 18:30～	「書くこと」の授業に関する検討会(その1)
第3回	2024/07/22 (月) 18:30～	「書くこと」の授業に関する検討会(その2)
第4回	2024/08/22 (木) 18:30～	2学期の単元指導計画や実践について
第5回	2024/10/07 (月) 18:30～	論説文や実用文の授業の工夫について
(第6回は都合により中止)		
第7回	2024/12/10 (火) 18:30～	言語文化や古典探究の授業の工夫について
第8回	2025/01/14 (火) 18:30～	H先生の研究授業に向けた指導案検討
第9回	2025/03/04 (火) 18:30～	H先生の研究授業の事後協議会
第10回	2025/03/31 (月) 19:00～	1年間の国語科の授業を振り返って

(2) 取り組み内容の一部として

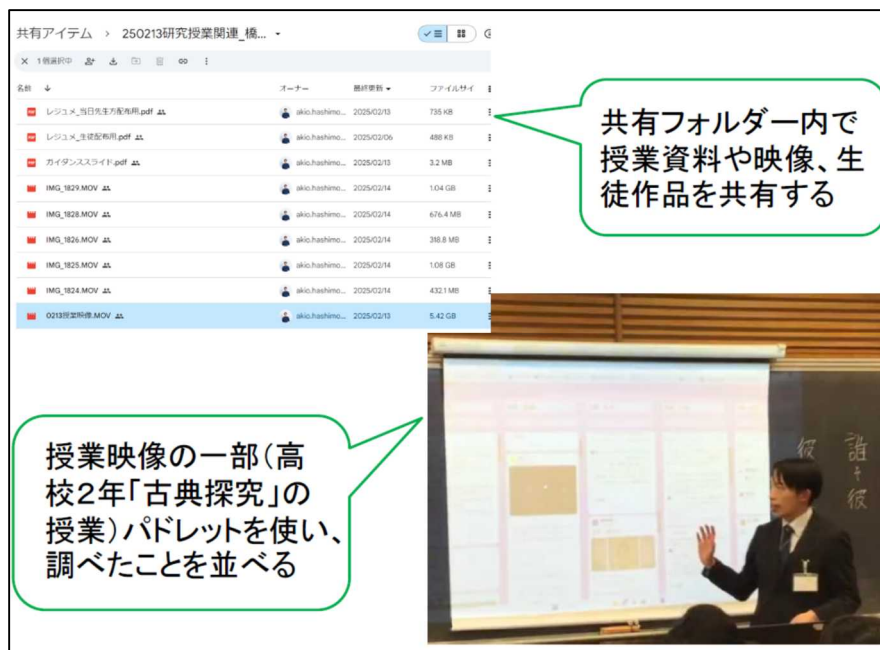
[illegible]

また、第7回の研究会でも、次のような「言語文化」や「古典探究」の授業における学習の手引きやワークシートが示された。生徒の主体的な学習を実現する上で、こうした教材を仲立ちとして互い

の指導の工夫を具体的に交流し合う機会があることは、極めて有効であることが認識された。



探究的な学びの実現に向けた研究授業は2月に実施されたが、その前後の研究会では事前の教材研究や指導案検討が行われた。授業者と学校の許可をいただき、チーム内に限定して下のように授業映像や生徒作品を共有し、授業研究と事後協議を行うことができた。



3. 本プロジェクトの成果と課題

(1) アンケート調査より

授業づくりチームに参加した教員にアンケートをとったところ、本プロジェクトに対して次のような意見が寄せられた。(下線部は成果として着目すべき箇所)

- ①前半は、あるテーマについてアイデアを持ち寄り、後半は研究授業の検討という形で、自身の課題に向き合うことができた。「書くこと」について、他の先生と意見を交換できたことで、授業での目的意識が明確になった。
- ②様々な視点からご意見をいただいたり、自校とは異なる価値観があったりする中で、自身の授業や目標を客観視できることが非常によかった。探究心のある仲間たちに、常にやる気をもらった。
- ③他校の先生方と意見交換する機会自体がそれほどないため、大いに刺激になった。日々の業務に追われるなか、新たな教材研究や指導法改善への知見を様々得られたことは、自分自身の動機付けにとって大変前向きな効果があった。
- ④授業づくりチームのミーティングの場で、自分の仕事上の悩みを聞いてもらえたことで、気持ちを落ち着けてまた仕事に向き合うことができた。

これらの意見からは、探究的な学びの実現に向けた授業開発には、「教員同士の意見交換の場が欠かせないこと」「授業の目標や指導内容等を複数の眼で検討し合うことが有効なこと」「実践への動機付けや悩み事の相談などの同僚性が必要なこと」が浮かび上がってくる。本プロジェクトでの取り組みを通して、授業開発にはこうした教師の挑戦や成長を支えるプラットフォームの存在が重要であることがあらためて確認された。

(2) 今後の展望

本プロジェクトでは、授業づくりチームによる継続的な研究活動が取り組みの中心となったが、その成果は次のように活用することが可能である。

・【大学】

実践交流を通して提供された様々な授業資料は、許可を得た上で、「中等国語科教育法」などの大学の講義でも紹介することができる。学生が国語科の指導案を作成する上でも参考となり、教科教育に関する大学の教材としても活用することが可能である。

・【附属学校】

公立高校や私立高校での授業の実態や実践の課題を共有することで、附属高校としての取り組みの方向性を検討する際の参考となる。合わせて、教育実習における実習生への指導の在り方を考える際にも、参考にすることができるだろう。

・【公立・私立学校】

各学校での教育実践の情報を交流することで、自身の勤務校に成果を反映させて授業改善につなげることができる。また、公立・私立学校で実際に授業研究を進めるにあたっての方法や組織作りについても、様々なヒントを得ることができる。

今後は、参加した教員それぞれが自分の所属する学校を中心に成果を還元し、実際の授業改善へとつなげていくことが期待される。